

2022 年度後期 START プログラム 事後レポート

所属学部・学科・学年	法学部法学科夜間主コース 3 年
------------	------------------

(1) START プログラムに参加して何を学んだか、この経験を今後どのように活かしていきたいか

タイにおける **inclusive** な社会実現のための取り組みを大きく分けて (1) 教育 (2) 社会の 2 つの側面から学んだ。

(1) 教育における取り組み

- ・ LD、ASD などの生徒に対する支援 (カセサート大学付属学校)
- ・ 公立小学校における英語教育 (Nakornnon Wittaya 1 School)
- ・ 少数民族への公用語教育 (ウドムラック先生の講義)
- ・ 貧困児童、および女子生徒に対する学習および資金的援助 (Save the children Thailand, ATD Fourth World, EEF)

(2) 社会における取り組み

- ・ 民間企業でのジェンダー平等 (ミシュラン)
- ・ 多文化共生コミュニティ (Kudi Chin Community)
- ・ 国家人権委員会

(1) においては、日本との比較をしながら考えていたが、概ね日本の公教育、特に初等教育は制度的にはかなり整っていると感じた。しかし質的には不十分だ。タイの教師がほぼ正教員であるのに対し、日本では障害児教育や外国人児童生徒への日本語支援は非常勤教師やボランティア頼りが多い。公立小学校での英語教育や ICT 機器使用も日本と同じだが、クラスサイズが日本は大きく、公立小学校教員の英語力はタイほどない。ここでも **human resource** が問題だと思った。

(2) においては、タイに学べる点があると思った。女性、障害を持つ人の社会参加、移民難民の受け入れは日本に必要であり、そしてそれらに伴う様々な差別やあつれきへの問題にどう対処するかも問われている。タイはムスリムに対して日本より寛容だった。日本でもモスクや祈祷場所の設置、ハラールフードの提供が増えなければならない。

来年、アジア政治の演習を予定している。まだ何に焦点を当てるか未定だが、王制のものとの民主主義は、タイと日本の共通点を踏まえて、選択肢のひとつになった。また、ダイバーシティに関する副専攻プログラムの受講も予定している。タイの多文化共生の取り組みについて、特に宗教問題と少数民族やミャンマー難民についてはもう少し掘り下げて調べ、日本の移民問題に対して自分の見解が持ちたい。

(2) プログラム内容についての全体的な感想

今回参加するにあたって、自分は若い学生と違ってタイの学生と交流して視野を広げるというだけではだめだと思っていたので、常に問題意識をもつことを心掛けていた。多くが教育に関する内容だったので、自分の知識経験と照らして考えることができ、この点は教員だったキャリアをありがたく思った。しかし、法学部学生として政治を学ぶ立場でタイの政治や社会問題に対して、タイの学生たちと議論することはできなかった。まさにこれを START として次の段階に進み、もっと関係を深めないとだめなのだなと思った。

タイ語が全くできないので、コミュニケーションが限られた。学生だけでなく、町の人とも話してみたかった。本当にある国のことを知りたいと思ったら、その国の言語を理解することがまず基本だということを改めて感じた。

他国に比べて日本とのつながり、共通点が深いと感じた。英語が公用語でも副公用語でもないし、走っている車はほとんど日本車(ガソリン)だった。付属学校では第二外国語として、日本語を選ぶ生徒が一番多いと聞いた。中国語より多いことに少し驚いた。ウドムラック先生を始め、女性が生き生きと仕事をしているように見えた。管理的立場にある女性が日本より多いと感じた。

発展途上なのだろう、観光産業に食欲で、フードロス、大気汚染、プラスチックごみに無頓着な点、そして貧富の差が気になった。

(3) 今後 START プログラムに参加する後輩へのアドバイス

自分なりの目標をもって参加して欲しいです。例えば、友達を作る、各講義では必ず質問をする、自分から常に話しかけるなど人それぞれでいいと思います。

内容は深く、かつ英語でなされるので理解しにくい点もあります。それを補うのが予備知識だと思うので、訪問先や講義内容が前もって分かれば、そこについて少し調べておくといいと思います。

英語力はなくても大丈夫ですが、やはりあったほうが断然いいです。広大で提供している色々な英語学習プログラムを利用して少しでも習得したほうがいいです。

シニア学生はタイには珍しいそうで、存在自体がユニークです。このグループにあなたがいてよかった、勉強になったとタイの学生に言われました。シニア学生も遠慮しないでください。

2022 年度後期 START プログラム 事後レポート

所属学部・学科・学年	法学部・法学科昼間コース・3 年
------------	------------------

(1) START プログラムに参加して何を学んだか、この経験を今後どのように活かしていきたいか

今回の START プログラムに参加して、主に 2 つのことを学んだ。まず、自分自身の弱点を知ることができたということである。現地の学生とのディスカッション、授業の受講を通して、自らの英語力、思考力・ディスカッション力、プレゼン力が不足していると感じた。特に思考力・ディスカッション力に関して、タイの学生との差を痛感した。現地の学生は、自国の現状、問題、世界情勢について理解し、自分の意見を持っていた。このことで、意見に説得力が増し、ディスカッションへの貢献につながっているということを感じた。さらに、多様性、教育といった難しい概念を整理し、英語で伝えることができて初めて、異なるバックグラウンドを持つ人とディスカッションができるようになるということがわかった。この経験から自分の目指すべき英語力の目標を知ることができた。また、プレゼン力に関して、今回のプログラムでは、英語でプレゼンする力、意見を伝える力を養うことを目標としていた。英語で意見を伝える力は日を追うごとに養うことができたが、プレゼンする力は不足していると感じた。実際に 2 回行ったプレゼンでは、表情が硬く、メモを見てしまう等、魅力的なプレゼンをすることが出来なかった。参加学生から、堂々と、聞きやすい声で、和やかな雰囲気にすることの重要性を学んだ。

次に、異文化交流から多くのことを学んだ。異なるバックグラウンドを持つ人との学び、生活を通して、特に将来に対するマインドセットを学んだ。タイの学生は、キャリアの道は多数あると考えており、目標に向かって努力していた。一つの会社、組織で働くことを考える学生がまだまだ多い日本との違いを感じた。また、現地の学生と交流する中で、政治、宗教など気を付けるべき話題があることを実感した。世界の宗教や政治の知識がなければ、グローバルな場では適切にふるまうことはできないと再認識した。海外で働きたいと考えている自分にとって、このことは重要であり、世界基準の知識をつけて適切に振舞えるようになりたい。

今回のプログラムで得た経験は主に 3 つのことに生かしたいと考えている。まずは今年の夏からのイギリス留学だ。今回培った英語で意見を伝える力を生かしながら、留学前に今回発見できた自分の弱点を直して多くの知識を学びたい。さらに、異文化交流を通して学んだグローバルな振る舞いを意識してトラブルをできるだけ避け、長期留学をさらに有意義なものにしたいと考えている。2 つ目に、自分自身のキャリアだ。海外で仕事をしたいと考えており、今回のプログラムでは、海外で生活する、学業・仕事で活躍するた

めに必要な素養を見つけることができた。また、現地の学生が持っているグローバルなキャリアに対するマインドセットにおいて見習うべきことがいくつかあると感じた。これからの生活の中で、海外でキャリアを歩むための方法や、仕事で活躍できるようにするために必要なものは何か考え続け、実践していきたい。最後に、学業に関して、行政について研究してみたいと考えた。私は法学部ということもあり、行政に興味関心がある。タイに実際に訪れて、タイの行政、特に交通の面で改善できることがあるのではないかと考えた。まだどういう進路を選ぶのか決まっていないが、他国との比較し、タイもしくは日本の行政の在り方、関わり方について研究したい。

(2) プログラム内容についての全体的な感想

今回のプログラム内容について、感じたことは主に 2 つある。まず、教育というテーマについて現地視察を交えて学習できたことは自分の財産になったということである。今回、新たに自分の専攻ではない教育という分野に関心が生まれた。特に英語教育に興味をもち、小学生のうちから実践的な英語教育を行っている学校に衝撃を受けた。日本に実践的な英語教育を行っている学校はあるのか疑問に思ったと同時に、日本の学校教育にも取り入れるべきことはあるのではないかと考えた。以上の教育のようなテーマについても、行政についての研究に加えて学習したいと思う。さらに、**Human Rights Commission** で、人権法について学んだ際にも、自らの興味関心が広がった。プログラムに参加する前は、公共的な法律や政策にしか興味がなかったが、実際に施設に訪れ、人権について学ぶことで、人権法や日本における人権についても関心を持った。この経験から、アカデミックな場合においても、知らない領域、テーマに飛び込むことの重要性を学んだ。

上記で学んだことの他に、反省するべき点もある。まず、座学と現地視察や施設訪問を「つなげて」深く学ぶことができなかったということである。座学と現地訪問の関連を考えないまま参加してしまったことで、自分なりに深めることがあまりできなかった。プログラムテーマや授業で学んだことを意識しながら、施設訪問で感じたことをつなげることができたならば、多様性やインクルーシブ教育をより理解できたのではないかと感じている。今後の学習においては、知識と実際の見学などを「つなげる」ことを意識して学び続けたい。

最後に、学生や先生との間に、「信頼と共感」を作ることができなかったということである。学生の中には、上手く先生や現地の学生と関係を構築できていた一方で、私は遠慮や学生への関心を持つことの不足、挑戦心の不足から、あまり「信頼と共感」の関係を作ることができなかった。日本にいても海外の人と関わるのが当たり前になっている現代、

関係構築力の不足は自分の弱点だと感じた。9 月からの長期留学では、後悔することがないように、挑戦心をもって努力し続けたい。

(3) 今後 START プログラムに参加する後輩へのアドバイス

伝えたいことは主に 2 つある。まず、事前準備をできるだけ行うということだ。具体的には、現地・日本について学ぶ、テーマに対する事前知識をできるだけつける、英語力を高めるということである。まず、日本に対して理解しておくことが大切だと感じた。日本の宗教、政治、情勢について最低限理解しておくことで、現地の学生からの質問に答えることができ、より密なコミュニケーションを取ることができることに加えて、訪れる国との比較がよりしやすくなる。さらに、日本とは違うところや取り入れるべきことを常に意識することで多くのことを日本に持って帰ることができる。特に英語に関して、準備してもしすぎることはないと考えている。START プログラムは英語を実践する機会として有用であることに加え、ある程度の英語力は現地の学生とのディスカッション、発表を深めるために重要であるからである。怖がる必要はないが、現地の学生は英語力、知識・教養のレベルが高いことが多く、彼らから学ぼうとする姿勢も大切である。しかし、自らの英語力が不十分であると感じても自分の意見を話す気概こそが重要である。しっかりと意見を伝える、議論に貢献しようとする姿勢が、協力する雰囲気を作り上げ、また自分自身の弱点を知るきっかけにもなるからだ。

最後に、プログラム参加中に留意すべき点として、授業で得た知識と現地の視察、観光で感じたものを「つなげる」という意識で参加するべきということである。そうすることで、常にアンテナを張った状態でプログラムに臨むことができ、質の高い質問をしたり、能動的に知識を獲得したりすることにつながる。前向きに、挑戦心をもって臨むことが一番大切なことであり、同時に自分が一番足りなかったことだと感じている。せっかくの短期留学、全てを学び、貪欲に吸収する機会にして欲しい。